

居場所と出番のある社会づくりをめざしました。

Oの人々を官邸に招いて、社会的孤立を防いで一人ひとりが社会的包摂の概念を掲げ、湯浅誠さんをはじめ多くのNP

念。ここから寄付税制の大幅拡充が実現しました。菅政権で

ています。たとえば、鳩山内閣で打ち出した新しい公共の理

両内閣では、これぞ政権交代の成果、という政策も実現し

近で見えてきました。

私は、政権交代直後の鳩山政権で国土交通副大臣を務め、その後社民党の政権離脱、自身の離党を経て、菅政権で東日本大震災直後から災害ボランティア担当の首相補佐官として政権の内側から、多くの期待を背負って誕生した新政権を間近で見えてきました。

なぜ期待に応えられないのか

ねじれ・政権交代時代の合意形成とは

つじもと・きよみ 一九六〇年生まれ。早稲田大学在学中にNGO「ピースポート」を設立。九六年衆議院議員選挙に社民党から立候補し初当選。二〇〇二年に議員辞職するが〇五年、〇九年衆議院選挙に当選。連立政権で国土交通副大臣に就任するが党の連立離脱に伴い辞任。一〇年七月社民党を離党。一二年九月民主入党。東日本大震災に際し災害ボランティア担当内閣総理補佐官を務めた。

辻元清美



官邸で開かれた「一人ひとりを包摂する社会」特命チーム会議。「社会的包摂に関する緊急政策提言（案）」が出される（2011年8月10日）

今こそ政治の質を変える時

しかし、一方で民意を掬い取ることができなかったり、政治的に未熟な側面が目立ったりと、国民の期待に充分応えられない面が多かったのも事実です。

なぜ期待に応えられないのか。どうしたらいいのか。

ここでは構造的な問題と、個々人の問題それぞれに着目して考えてみたいと思います。民主党の一員となり、与党に復帰した今、それが私の責任の一つでもあると思うからです。

そのためにまず、私の政治的軌跡を振り返り、政治観がどう養われていったかを振り返りながら、政治とは何か、与党とは、統治とはどうあるべきものなのかについて考えてみたいと思います。

私が初当選したのは一九九六年。社民党から、土井チルドレンの市民派候補としての政界入りでした。私の原点は市民

運動です。一九八三年からピースボートという、船旅を通じて国際交流を行う団体を創設して活動してきました。私が目指したのは、スローガン・要求型ではなく、市民自ら対案を示して動き、解決を模索していくNPO型の市民運動でした。自分たちで資金を集め、自分たちを「雇用」して給料を払い、経済循環を興す。民による直接の国際交流を行い、国際紛争解決の政策提言も行いました。そして、政治の側にも、このように各分野で広がる新しい動きの受け皿となる人が必要だと国政の場に入ってきました。

私の初当選当時、社民党は自民党と連立を組んでいました。「自社さ」政権です。自民党はすでに単独では政権を維持できなくなっていました。しかし、戦後日本を建て直してきたベテラン保守政治家がまだたくさん現役でした。

竹下登元首相もまだお元気でしたし、野中広務さんは幹事長代理として、それこそ自社さ政権の安定のため、最前線でも配をふるっていました。加藤紘一さんは幹事長、山崎拓さんが政調会長でした。自民党がまだ自民党らしかった時代といえます。社民党は小所帯でしたから、一年生議員の私も、何かと役職があり、そういった「大物政治家」と間近に接する機会が多かったです。

市民活動出身の私と、「ザ・自民党」ともいべき保守政治家の彼ら。全く異質のようですが、政権を担っていくとはどういうことか、政治家とはどういう振る舞いをするものな

のか、彼らから多くのことを学びました。これが私にとって、後々大きな財産となるのです。

たとえば、当時私はNPO法の立法のために走り回っていました。自民党に賛成してもらわねば成立しません。そこで、大実力者に直談判しようと思ひ、ある会合で、ふとした隙をねらって、竹下さんに直接訴えかけたのです。

「こんにちは、初めまして。私は辻元と申しますが、NPO法について……」

ほんのひよっこ議員、しかも小政党の私を元首相は一瞥すると、

「ああ、NPOか。税はいかんよ」

と、ビシッと一言。そして「人生、誰もが反面教師」と言いながら、ひよっこひよこ去って行ったのです。

竹下さんといえば税の専門家でもあります。NPO法の争点の一つは、税の優遇を認めるかどうかでした。この、一瞬にして相手が誰か、何をやっているのかを見抜き、何を話したいかを理解し、本質を切り取って必要最小限の言葉で相手に伝える術。そのための情報収集能力は見事なものだとゾッとしました。

自民党政権の功罪

もちろん、自民党にも功罪両面があります。たとえば外交やアジアとの付き合い方です。日本は敗戦後、高度経済成長

のなか、アジアの国々に対してODAの支援などをしてきましたが、戦争をどう総括するのか、どうけじめをつけるのか、ということについて真正面から向き合ってきたでしょうか。きちんと信頼関係を築いてきたとは言い難く、アジア諸国が経済的に豊かになったこととあわせて、今まで先送りしてきた問題をいま突きつけられています。

日米関係にしてもそうです。安全保障体制を構築するという掛け声のもと、沖縄の基地問題をどう考えるか。数え切れないほどの沖縄県民の犠牲のもとに、ずっとあいまいにし、先送りをしてきたから、今、普天間飛行場の移設問題としてそのツケがまわってきているのです。

原発についても然りです。先日「提言型政策仕分け」で原子力政策の議論が行われました。その場で飛び出した文部科学官僚の発言に、私は愕然としました。「除染など、これまでの事故対応の研究は？」と問われ、「今まで行ってこなかった」と言うではありませんか。「なぜ？」という再質問に「事故対応の研究をすると、原発は事故が起る危険なものだと認めることになるから」と。明らかに国策の誤りで、長年国が過ちを犯してきたのです。

この自民党政治の体質は、政治家の世襲問題にもつながります。自民党には親の代から業界や官僚とつながっている人たちもいます。票とカネ、政策で鉄の三角形ができあがっていました。いったい他のどの業界に、組織の半分を二世三世

が運営している、というところがあるでしょうか。どの組織でも、同じルーツを持った人が一定量を超えるとよどむし、変化できなくなります。自分の親の代からの政策を疑わないし、本当の改革もできなくなってしまうと思います。

もちろん、ここには当時の野党だった社会党も加担しています。労組を基盤に自分たちの権利と利益配分のための要求実現と問題追及では一定の力を発揮してきましたが、政権交代をして自らの手で政策転換をしようとするパワーがありませんでした。それでも、高度成長の時代はこれでよかったでしょう。

しかし、歴史的にこれでは立ち行かない時代がやってきます。東西冷戦が終わり、日本も低成長の時代に入り、だれもが分け前をもらえる時代も終わったのです。

政治も改革を迫られます。それが、九三年の初の自民党下野と細川政権の誕生となるわけですが、ここで政治改革が小選挙区制度導入に矮小化されてしまい、新しい政治理念をどのようににつくり、それぞれの旗のもとに結集するか、ということにはならなかったのです。

その結果、どうなったか。今の自民党と民主党を見ると、双方にいろいろな理念の人がいます。たとえば、新自由主義的で、負担はできるだけ小さくして小さな政府が望ましい、という主張の人と、中負担・中福祉が望ましい、という考えの人がそれぞれに混在しているのです。だから、政党の違い

が非常にわかりにくいのです。

それに加えて、政権交代の中心となっていたのが、小沢一郎さんという、最も古いタイプの自民党政治で育てられた人物でした。自民党をもっともよく知る人だからこそ、弱点や倒し方もわかっていたので政権交代には大きな力を発揮しました。歴史を見ても、新勢力が旧勢力の一部と手を結ぶことで政治体制が大きく変わることは多い。でも、政治の体質の違いは、その後の民主党の政権運営に大きな溝をつくりました。

しかし、とにかく、これまでのしがらみや既得権にしばらくれた自民党政治ではだめだ。そうして民主党政権が誕生し、鳩山由紀夫さんが首相に就任しました。鳩山さんはいかにも育ちがいいというか、民のために何かいいことをしたい、そのいいことを探している政治家だと私は思いました。それがうまくいくと、例えば「新しい公共」として結実したのです。しかし鳩山さんは、「これが正しい」という理念はあっても、「何が何でもやり通す」というしたたかさとしぶとさが希薄だったのではないのでしょうか。

政権維持にかける執念の欠如

そして鳩山政権も菅政権も、政権維持のために走り回る人が少なかつたように思います。自分のやりたい政治を実現するときに、言うまでもないことですが、政権基盤の安定は絶

対に必要なことです。しかも、今や一党単独では政権をつけない連立の時代です。連立政権をどう維持して、安定政権をつくっていくかは非常に大事なことです。加えて、衆参のねじれの問題もあります。非常に複雑な連立方程式を解くようなもので、そこには政権の基盤を安定させるための「執念」と「技術」が今まで以上に必要です。

たとえば、鳩山さんは二〇一〇年、首相の時に普天飛行場の移設問題を解決するための期限を五月と区切りました。米国議会の状況を勘案しても、本当に期限を切るのが必要だったのか今でもわかりません。一説には、社民党を切った方が民主党らしきが出ると耳打ちする人が現れて、社民党を切ることが頭にあつたからだという人もいます。つまり、五月には予算など重要法案も国会を通っているであろう、従って参議院で多数を持つために社民党を連立に入れておく必要はもうない、だから普天飛行場の県内移設に踏み込んで大丈夫……というわけですね。

辺野古への移設を目指す動きは、二〇〇九年の一月にもありました。一〇月頃からその動きをキャッチしていた社民党は、沖繩の運動と連携して「先送り」を目指しました。その後、二〇一〇年一月の名護市長選挙では反対派が勝利し、辺野古への移設は事実上不可能になりました。こうした沖繩の「うねり」を肌で感じていた私は、鳩山さんに何度も進言しました。

「辺野古に戻したら、普天間問題を抱えて総理が政権から放り出されることにつながります」

一度こう直言したとき、さすがに鳩山さんも顔が青くなりましたが、判断を変えることはありませんでした。このときは普天間問題をきっかけに鳩山さんだけをすげ替えよう、という動きが民主党内にうごめいていましたが、鳩山さんは気づいていなかったようです。当時の小沢幹事長にも「鳩山さんとセットで小沢さんも責任を問われるのですよ」と迫りましたが、「社民党はスジを通すのなら出て行くしかないだろう」とそっけなかったのは、何らかの政局判断があつたように思います。私はその後、社民党内では「ここで離脱したら思うツボ。政権に残って、泥をかぶっても沖繩の声を伝える役割を担えないのか」と、ギリギリまで妥協点を探りました。「けしからん」と出て行ったときは「潔い」と拍手されますが、何が成果として残るのかで勝負しなければと。せっかく取った政権をたつた八カ月で崩壊させるのはもつたないないとも思いました。しかし結局、社民党は連立を離脱し、そして鳩山さんも小沢さんも辞任することにつながっていくのです。

政権基盤を安定させることへの執念が足りなかつたのでは、と思うのは菅政権に対しても同じです。目の前に迫つた参院選で菅さんは唐突とも思える消費税増税問題を争点に持ち出しました。そして、敗北。政権維持のいろはの「い」は党内でコンセンサスのないことをいきなり持ち出

すことは、政権運営にとって地雷を踏むことになる菅さんは考えなかつたのでしょうか。そうして衆参のねじれが出現して、以後の国会運営は非常に苦しいものになったのです。ねじれになって以降、たとえば「復興関係予算を参議院でも通したいのなら、子ども手当を減額しろ」というように、自民党は特にマニフェスト主要政策を狙い打ちして変更を迫ってきます。そして修正協議をして、変更すると、世論からは「マニフェスト違反だ」と批判されます。いまや「三党合意」は民主・自民・公明となり、私も合意づくりに奔走した民主・社民・国新の「三党」による労働者派遣法改正などの政策はほとんど妥協を強いられています。政治力学が変わつたのです。少しでも前進するのなら、と涙を飲んでいきます。参議院で多数を取っていたならば、こんな状況になつていないのです。

私はここで、自民党の野中さんを思い出すのです。

小渕政権で官房長官に就任。参院で野党が過半数を占めて国会運営で妥協の連続を迫られると、自民党を出て行った小沢さんの率いる自由党に連立政権参加を要請します。その時の心境を野中さんは「悪魔にひれ伏してでも」と表現しました。そこまでしても、政権の安定を手に入れたい、ということだったのです。

もちろん、政権基盤安定ばかりに気をとられて、本来の政策実現が後回しになっては元も子もありません。しかし、そ

これまでして政権基盤を安定させなければ、自分のやりたい政策なんて実現しない。そういう、したたかさ執念、技術はどんな政権にも必要なものなのです。

また、民主党の掲げた「政治主導」についても、官僚との付き合い方がギクシャクしてしまったのではないのでしょうか。私は、内閣が変わるたびに一定数の官僚のスタッフを政治家が任命し、この内閣が終わってしまえば自分たちの立場も危うくなるという集団が官の側にもいた方が、今より良い政策を実現しようという本気度は高まると思います。

官僚は、民主党が政権交代するまで、五五年体制から、ほんの一時を除いてずっと自民党と人間関係を築き、二人三脚で国政を遂行してきたわけです。その半世紀以上のいわば「王朝」は、ちょっとやそつでは崩れない。官僚は、表面上はときの与党に仕えているふりをしながらも、野党と裏で通じていたりすることだってあるでしょう。政権交代前も、巨大で複雑な行政システムを共に動かしてきたのだから、それはある意味しょうがないのかもしれない。民主党もいつまで続くかわからないから、自民党とも関係を維持しておこう、と保険をかけるのは。しかし、これでは日本は変わらないう、と保険をかけるのは。しかし、これでは日本は変わらないう。あるとき、私の目の前で「菅総理はどうしようもない」とブツブツ言う官僚に、「では、誰がいいと思うのか」と問うと、少し考えた後に「谷垣さんかなあ」とポソッと言い出した。震災対応の極限状況で共に仕事をするなかで、私に気

持っている地域が多いのが現実です。日常生活に密着した諸問題を、一体で改革していくには自治体議会も政権党がとらなければ、なかなか身の回りのことまで変えていくことは難しいでしょう。私たちの仲間を地方レベルでもっとも増やさねばなりません。そして、国民も「今の政治はけしからん」とブツブツ言ってるだけではなくて、自分の住む自治体の政治にもっと関心を持ち、足下から変えていこうとしなければ、本当の変革は起こらないと思います。

お任せ民主主義を超えて

さて、菅さんについてです。補佐官として菅首相と共に官邸で働いて、色んなことを考えました。菅さんは市民活動から政界入りし、しかも政治人生の前半は、社民連やさきがけという小政党です。ピースポートの活動から、小所帯となった社民党から国会議員になった私も似た経歴で、それだけに、菅さんの行動や思考について、理解できるところが多々ありました。

私は首相補佐官を引き受けたとき、「たとえ官邸が焼き討ちに遭おうとも、総理と運命を共にする」と腹をくくりました。だからこそ、菅さんにはみんなが言いにくい厳しいことも言いましたし、仙谷由人官房副長官との間にすさまじい風と囁かれたときは、関係がうまくいくように心を砕きました。被災地に駆けつけた一〇〇万人のボランティアの人たちが働き

を許して本音が出たのかな、と感じました。しかし、首相補佐官として、私もなめられたものだとも思いました。

一方、政治家も「この人はどんな考えで、何をやりたいのか」と官僚一人ひとりをよく知る必要があります。そして、どうチームプレーで仕事をするのか。政治主導とは、政治家が勝手にふるまうことでも、官僚を無視することでもありません。野党時代の私は、今から思えば、問題点を突いて官僚を論破し、改めさせようとしていたのです。野党ではこれはある程度有効ですが、しかし、反発を買って逆にだめになることもあります。

私は副大臣と補佐官の経験を通じて多くを学びました。官僚と十把ひとからげにいつても、いろいろな人がいます。私たち政治家がきちんと方向性を示し率直に議論をする。そして信頼関係をつくり、官僚には政策のオプションを示してもらい、政治家はそれに政治の観点から足したり引いたりして、ほかの政治家と交渉する。これが政と官の役割分担であり、政治主導ではないでしょうか。私は国交副大臣時代、こうやって、JAL再建や、これまで国交省内の抵抗が大きかったために二〇年以上未解決だったJ-R不採用問題を和解へと導きました。

さらに、政治は永田町だけでは成り立ちません。地方議員の問題もあります。中央では政権交代を果たしても、都道府県や市町村の議員のレベルで見ると、まだまだ自民党が力をつけて任務に当たりました。

与党のリーダーとなり、首相になるということは、言うまでもありませんが、政策を実現するだけではなく国を「統治」するのが仕事です。

ここで、五五年体制確立以降ほとんどの期間、政権を担ってきた自民党の政治家育成システムについて考えてみます。新人議員として当選してくると、ほとんどの場合どこかの派閥に所属して、ボスに任せ、政治家としての振る舞い、官僚や外国の要人とのつきあい方などについて学んでいきます。いわば、下積み期間がちゃんあるわけです。派閥のボスは首相を目指すのが建前ですから、それに伴うすさまじい権力闘争も経験する。ボスが運よく首相になれば、首相としてどう行動していくのかも観察し、勉強する。いざ自分が大臣になり、やがては首相になると、自分も下積みで苦労してきたので、自分を支えてくれる人たちの気持もわかりますから周りにも配慮する術を知っていて、政権運営に活かされてきたのです。

一方、小政党の私たちはどうだったか。

当選したての私が、いきなり責任ある立場でNPO法の立法に携わるなど、数が少ない分、チャンスも多く回ってきます。しかも、それが与党で、キャスティングボートを握る立場

にいたりするとそのチャンスも大きな力を持ちます。いきなり政審会長をやったり、大臣に就任したりする。つまり、下積みの期間があまりないわけです。

そのぶん、突破力があつたり、既成概念にしばられずに行動できたりします。再生可能エネルギー促進法を成立させるなど、菅さんの市民運動家のような力が物事を動かしたこともたくさんあります。

反面、周りに配慮して人を動かすことや、自分をどれだけ多くの人が支えているかということへの共感、思いやりが欠けてしまうこともあると思うのです。しかし、一国の首相という、全体を統治する立場であれば、自分と意見が違う人を攻撃だけするのではなく、包み込みながらどのように調整を図るかがいっそう大事になります。自民党では、小泉純一郎さんの時期はこれとは違ったように見えますが、政務秘書官の飯島勲さんや参議院の青木幹雄さんが守護神となって調整をはかるなど、小泉さんと役割分担していたと思います。

一方、小政党ならではの悲哀ももちろんあります。いかんせん「数は力」の、その基盤が決定的に欠けているわけですから、国会での質問時間も少ないですし、なかなか存在感を示す機会がない。そのなかで選挙でも当選し、闘っていくためには、どうしても目立ってなんぼ、ということになり、パフォーマンス的な行動になりがちです。

私もかつて、精いっぱい社民党と自分を目立たせて、自分は、粘り強く政治の質を変えることに力を尽くしていきたいと思うのです。それは、「新しい公共」や「社会的包摂」の概念で示されたような、スローガン・要求型の闘争ではなく、実践型で社会を変えていこうとするNPOの人たち、そういった人たちのつくった潮流を政治家が受け止めて、政策として実現していく。国民が自分たちの責任を自覚して自ら挑戦し、政治はそれがしやすい基盤を整える。もし失敗しても、孤立せず、再び挑戦できるようにセーフティネットを整える。

これからの時代、負担が増えていくのは避けられない。でもそれをどうやったら納得できる形にして、世代間で断絶せずに連帯して分担していくか。オープンに議論して、おまかせ民主主義ではない、当事者として参加する社会に変えていく。政治はそのためにあると思うのです。

国民のカタルシス解消に支えられた喝采型・トップダウンのリーダーシップではなく、市民参加型・ボトムアップのリーダーシップを発揮していきたいと思えます。

政権交代によりほとんどの政党が与党も野党も経験したいま、日本の政治システムは新しいステージに入ったことは間違いない。連立・政権交代時代の政策転換のやり方、そしてねじれ時代の与野党の合意プロセスのあり方を生み出すために、与野党の垣根を越えて議論を呼びかけていきたいと考えています。単なる政権取り合戦の政治に終止符を打た

も何とか次の選挙で生き残り、党勢拡大をはかりたいという思いがありましたから、それは痛いほどに理解できます。国会での追及や、官邸に乗り込んだ、かつての私の姿を思い出される方もいるでしょう。

それで生き残り、菅さんの場合は一人から出発し首相の座に上り詰めたわけですから、どうしても長年しみついたパフォーマンス的手法がしみ出てしまうことがあつたように思います。かつて、自民党のベテラン議員がこう語ってくれました。

「政治というのは、ステージの幕があがるときには大半終わっている」

つまり、決着への道筋が見えない状況で表舞台に出してしまつたら混乱にしかならない場合が多い、というのです。それは極端としても、たとえば菅さんの場合、唐突にTPPを持ち出して「平成の開国」とぶち上げたのも、「これはいける」と直感的に思ったことをそのまま出したように見えました。もちろん、根回しをしたらつぶされる政策もありますから、その使い分けが重要です。小政党が一つ派手に打ち出して注目を集めるのならそれでいいですが、権力が大きくなればなるほど、ていねいさが伴ったリーダーシップが求められると痛感しました。

さあ、その菅さんも退陣し、民主党はいよいよ三代目の首相になりました。

なければなりません。

そして、今のように理念で結果していない政治は、いつか遠くないうちに、やはり明確な旗のもとに再結集する必要があると思うのです。そうでなければ、国民に分かりやすい選択肢も提示できないでしょう。

その時自分が何をするのか。政府の役職を経験して、また東日本大震災の対応の前線で働き、今の政治の限界に歯ぎしりもし、多くのことを学んで、私自身変わったと思います。こうした経験を生かして、私たちの世代の手で政治の質を変えていく。それが私の次の仕事だと、そう思っています。

被災の手記公募を継続します

本誌では、東日本大震災・原発災害の被害にあわれた方の手記を募集し、寄せられた手記の中から二一篇を昨年末発売の別冊に掲載いたしました。この大災害が長期にわたって影響を及ぼし続ける深刻なものであることに鑑み、本誌はこの手記募集をしばらくの間、継続することに決めました。

第一回締め切りは二〇一二年三月末日。

テーマ①東日本大震災―私の体験 ②被災して気付かされていくこと、考えていること、決意していること

枚数②四〇〇字三〜八枚程度 ※大震災・原発災害の被災者であれば、年齢、国籍など問いません。詳細は本誌ホームページ <http://mmmi.iwanami.co.jp/sekai/> をご覧いただくか、〇三―五二二〇―四一四三「被災手記募集係」まで